

## 台風接近！10月の四万十川について報告

肌寒い日が続くようになりもうじき訪れるであろう冬の季節に目をうばわれがちだが、ここでちょっと先月のことを思い出してみしてほしい。10月下旬ごろから台風が相次ぎ、日本各地でその影響が危惧された。四万十でも豪雨となり、別名「暴れ川」とも呼ばれる四万十川について多くの方からご心配の声を頂いたので、今月号では、先月の四万十川の報告を少しだけさせていただきますと思う。

結論から述べると、四万十は無事であった。どの沈下橋も落ちることなく、また周辺の集落等にも大きな影響はなかったと言える。



一斗俵沈下橋



上岡沈下橋



上岡沈下橋へ向かう歩道

一斗俵沈下橋は沈む直前で、水が橋を乗り越えて流れている。また、上岡沈下橋は完全に沈んでしまっており、対岸の歩道だけが見えている状態だ。さらに、上岡の場合は歩道にまで水が押し寄せている。今回は事務局周辺の報告ばかりになるが、上流から下流まであらゆるところで大雨による川の変化が見られたようだ。

増水時には茶色く濁った川の水も、台風が過ぎるとまたこんなにもきれいな水になる。そして、徐々に水の中から沈下橋が顔を出し、何事もなかったかのようにいつもと同じ日常が繰り返される。

それにしても、台風が来ると四万十のあちらこちらで川や橋に関する情報が飛び交う。「岩間も沈んだで。」「早瀬も流れたらしい。」フェイスブックにも続々と写真がアップされていく。そんな姿を見ていると、四万十の人々はあちらこちらでつながっているんだと感じた。

香川出身の私から見ると、これがまた四万十ならではの暮らしなのである。



## 一枚の写真から。

[3つの橋.jpg](#)



左の写真をご覧ください。よく見ると3つの橋があり、右から順に一斗俵沈下橋、源流大橋、清水大橋である。一斗俵沈下橋は四万十で現存する最古の沈下橋で、清水大橋は一番新しく架けられた沈下橋、源流大橋は利便性を考慮して後に架けられた抜水橋である。

集落に着目してみると、見えているのが米奥集落、手前（写っていないが）が壺斗俵集落である。壺斗俵集落は、昔、南部忠高が荒地であったところを田にし、貢物として穀一斗を献上したことからそう名付けられた。また、米奥集落は「米の川」と「川奥」という2つの地名からきている。米の川は壺斗俵と同じく南部忠高によって開拓された地であり、元禄地払帳によると壺斗俵よりも規模も石高もはるかに大きかったことが分かる。米がたくさんとれる地での「米の川」という名はとてもおもしろい。はっきりしたことはまだ調べられていないのだが、米が流れるほどたくさんとれたのか、川で流通させたのか、様々な憶測がたてられそうである。

# 一斗俵沈下橋と清水大橋

一斗俵沈下橋が架かる以前は、歩行渡り（かちわたり）と呼ばれる方法で対岸へ渡ったという。浅瀬を選んで着物をまくり上げ、フンドシを出して渡る方法であったが、危険なうえに不便であることは想像に容易い。そこで、次にできたのが板橋である。竹で編んだ筒状の籠のようなものの中に石を入れて橋脚とし、その上に板を渡した。板は川岸の大木に縄でつながれており、大水になると下流に流れたが、また縄を手繰り寄せて板を回収したという。しかし、ゆさゆさ揺れる板橋もやはり危険なので、次に考えられたのが渡し舟である。



一斗俵沈下橋.JPG

川を行き来するための渡し舟は、竿渡しと引き舟を併用しており、学校に通う子どもたちや商人などたくさんの方が利用した。小学校の6年間この渡し舟を利用したある人によると、雨の日、みのと笠をつけて竿を持って舟上に立っていた船頭さんの雄姿は、今も脳裏に強く残っているそうだ。しかし、やはり増水時の渡し舟による犠牲者も後を絶つことはなかった。

そして昭和10年、念願の沈下橋が渡船地に架設された。これまでの危険さや不便さを考えると画期的だと当時の住民は大喜びしたという。しかし、希望に満ちた沈下橋の工事も難航した。当時3000円という大金を集め、潜水師の命を落としながらやっとの思いで完成した沈下橋も、直後の災害により橋台が壊れ、中央部が流されてしまう。修繕工事においても、河床が深いために橋脚を安定させることが難しく、その結果、橋脚工事はせずに中央部のスパンを長くし厚さをつけるという手段をとっている。修繕工事には当初よりも多い3600円という費用がかかり、金銭的にも労力的、精神的にも苦難を強いられたことは言うまでもない。歴史を振り返ってみると、一斗俵沈下橋が当時の住民にとってどれほど重要なものであったか、そしてそれを後世に残し引き継いでいくことにどれだけの価値があるのかも、自然と見えてくる。

時代は変わり、平成7年には抜水橋である源流大橋が建設され、一斗俵沈下橋もその役目を終えた。しかし、今なお夏には子どもたちの遊び場として輝き続けているのである。

清水大橋は、住民たちが一斗俵沈下橋まで迂回するのに不便さを感じたことから作られた沈下橋である。こちら当初は板橋がかけられたようで、その橋脚が今も残っている。残っている3つの橋脚を比べてみると、石の種類や積み方が違っており、壊れては修繕していたことがよく分かる。また、橋にはたいてい見合い地蔵と言って対になって地蔵があることが多いが、清水大橋の場合は相方のお地蔵さんがいない。もともたいなかったのか、洪水によって流されたのか、それとも違う場所にあるのか。さらに、清水大橋にあるお地蔵さんは、一斗俵のものとは形が少し違っている。この地域には、まだまだおもしろいことがありそうで、とても楽しみである。



板橋の橋脚.JPG

最初にご覧いただいた3つの橋が映る写真。実はあの写真からは板橋の名残、沈下橋、抜水橋と3世代についてを知ることができる。さらに、集落についても詳しく調べていけば、より多くを語ることができそうだ。高知に来て、四万十川財団に勤めて、約8か月。ますます四万十はおもしろいと感じた取材であった。

## 東京四万十町展

武内元局長と神田局長



11月23・24日と昨日まで東京の浅草で開催されていた「東京四万十町展」に当財団も参加してきました。その中で、四万十川流域の文化的景観について説明をさせて頂きました。今回は四万十町が主催ということで、メインは今月の清流通信のような内容です。少しでも多くの方が四万十に目を向けてくれるといいのですが・・・！

一方で、局長は青森県の白神で開催されていたシンポジウムの中で、四万十川についての紹介をしてきました！

四万十川の魅力を全国に発信することができた2日間でした。

